

[1]九州大学応用力学研究所技術職員技術レポート表 紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1956579>

出版情報：九州大学応用力学研究所技術職員技術レポート. 1, 2000-03. Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

応用力学研究所技術職員技術レポート Vol. 1 発行に寄せて

研究所長 高橋 清

研究所における所員の研究活動に関連して技術職員が時間をかけて取り組んだ結果得られた技術的な成果を詳しいレポートにして内外の人々の参照に供することは有意義なことではなかろうか。本研究所では研究論文誌 *Reports* が発行されているが、技術職員による技術レポートは所員等による研究論文とはその性格を異にするもので、本誌のような受け皿の存在は技術職員の活動を公にするのに役立つものと考ええる。

このレポート発行の目的が、研究所における技術職員の日頃の活動を目に見えるようにすることであることは上述の通りであるが、さらに、そのことを通じて国立大学付置研究所技術職員の地位、待遇改善に少しでも役立たせたいということもある。

国立大学付置研究所技術職員の研究所における研究支援の実相は見えにくいものである。しかし質の高い研究を展開するにはその存在は不可欠なことは言うまでもない。その役割は博士後期課程の大学院生によってすらも置き換われない。時間をかけてなされる新しい装置や手法の開発を、限られた時間内で学問的成果を出すことを期待されている大学院生に要求することは一般的には困難である。公務員の定員削減の動きが加速するなかで、研究を遂行する上で技術職員が大学院生とは異なった役割を担っていることを世の人達に理解していただく説明責任が私共にはあるのではなかろうか。

研究というものはその目的、テーマを設定し、方向を定めた段階ですでに半分は終わっていると言っても過言ではないと思う。その意味で研究者（所員等）のテーマ設定、研究の方向付けの重要性はいくら強調してもし過ぎることはない。この故に、技術職員はその役割について謙虚であってほしい。しかし一方、特に実験的研究においては、残りの半分の出来、不出来は研究の質を左右する。そしてその決め手の一つが技術職員による支援の存在である。従ってこの故に、研究現場で支援をしてくれている技術職員諸氏にはその仕事に誇りと自信を持っていただきたい。

この Vol.1 の発行においてはわずかな準備期間の割には数多くの投稿があり、技術職員諸氏の熱意に満ちた協力の気持を感じた。その気持を、発行を予定している次年度の Vol.2 にむけて持続し、さらには研究所の今後の一層の発展のために結び付けていただければと願っている。

本誌の発行のために平成11年度の「所長リーダーシップ経費」のごく一部を使わせていただいた。この経費の存在がこのような新しい試みを実施に移すことを容易にさせてくれたことをここに付記させていただく。